

「染織品と松浦屏風」展によせて

大和文華館所蔵の染物について

大和文華館では、「辻が花染展」(1964年)、「琉球染織名品展」(1965年)、「インドネシアの染織展」(1978年)など、染織品に関わる特別展は開催していますが、館蔵の染織品をメインとした展示会は開催されてきませんでした。これは、染織品と分類される館蔵品の数が少ないことが大きな理由だと考えられます。今回の館蔵品展「染織品と松浦屏風」では、染織品に加え、美しい衣装(染織品)の描かれた近世絵画も並べることで展示作品の数を確保し、久しぶりの展示や初めての展示も含め、館蔵の染織品の大半を並べます。本稿では、その中より染めの技術が印象的な作品を5点紹介したいと思います。

日本では縄文時代の頃より素朴な織りや染めは行っていたようですが、その技術が大発展したのが、中国・隋唐の文化が熱心に取り入れられた飛鳥・奈良時代です。隋・唐の染織技術が多量もたらされ、この時期の優れた染織品は大切に現代まで伝えられています。そのほとんどが法隆寺と正倉院の伝来であり、「上代裂」と呼ばれています。

「上代裂帖」は貴重な上代裂の裂帖で、特に10頁から11頁には、様々な模様の染物の裂が貼られています。図1の裂は、薄茶色地に鳥や花などの模様が白く

表されていますが、模様部分を蠟で防染してから薄茶色に染め、蠟を落として白抜きにしています。こうした蠟防染の古名を藤縷とうろうといいますが、図2の裂は、赤地に七つ単位の菱形の模様が白抜きで表されていますが、こちらは糸で括った上で染液に浸す縷縷ろうろうと呼ばれる手法が用いられています。模様を彫った二枚の薄板の間に折りたたんだ布をはさみ、染料をそそいで染める夾縷さうろうと合わせ、この三つの基本的な防染法は三縷と呼ばれています。中国の技術の影響を受けてこの三縷が飛鳥・奈良時代に発展しましたが、平安時代は貴族の服飾として織物が好まれたことなどにより、最も素朴な縷縷以外の手法は平安時代以降に廃れてしまっています。

素朴な括り染め(縷縷)は庶民の用いる染物の中に残りつづけていきますが、複雑に縫って括り、より華やかな模様を表す技術が発展するようになります。図3の裂を見ると、複雑に縫い絞りをし、色が染まらずに白く残る部分が獅子の形になるようにしています。また、唐草などには金の摺箔、蜻蛉には刺繍が施されています。このような縫い絞りを基調として、摺箔や刺繍、描き絵などを加えた模様染めは、

室町時代から江戸時代初頭にかけて行われ、特に桃山時代に隆盛しました。図3の裂も桃山時代の制作と考えられています。こうした手法の染めは、近代から現代にかけては「辻が花」の呼称で親しまれていますが、中世から近世初期にかけては、「辻が花」とは赤が特徴的な帷子をさしていたことが指摘されています(小山弓弦著『「辻が花」の誕生—くことばとく染織技法—をめぐる文化資源学』東京大学出版会、2012年)。図3の裂も、大和文華館では「辻が花裂」という名称を用いていますが、今後は変化してゆくかもしれません。

平安時代に廃れてしまった蠟防染(藤縷)ですが、近世には蠟防染を用いた染物が再び日本にもたらされるようになります。それがインド製の本綿布です。藍などを除くと、植物染料で本綿を色濃く染めることは困難でしたが、インドでは媒染剤を用いることで問題を解決しました。まずミロバランの実(タンニン酸)を用いて下染処理を行い、赤にしたい所には明礬、黒にしたい所には鉄漿、紫にしたい所には鉄漿と明礬の混合液を塗ります。そして、茜の染液に浸すと、化学反応を起こして一気に赤・黒・紫色に染め上がるのです。藍などに染めたい部分がある場合は、その部分を蠟で防染してから、茜の染液に浸し、蠟を落として乾かした上で今度は、藍に染めたい部分以外を蠟で防染してから藍の染液に浸します。こうして染色されたインドの本綿布は、鮮やかで色落ちしにくく、特に大航海時代以降、ヨーロッパやアジアに広く渡って人気を博しました。

日本では「更紗」(佐羅紗などの字も用いられる)と呼ばれ、そのエキゾチックな布は、茶の湯(抹茶)や煎茶の世界で好まれ、道具の仕覆や掛軸の表具、箱の帙・包み裂などに用いられました。特に18世紀半ば以前までにもたらされた更紗は、「古渡更紗」と呼ばれ、珍重されています。図4は、中国・南宋の画院画家である馬遠の筆と伝えられる「竹燕図」を収納する箱を包む帙の拡大図です。この「竹燕図」は、江戸時代後期には広島藩主浅野家が所蔵していました。浅野家所蔵の中国絵画の名品は、上質な桐箱、古更紗の帙に収納されていることが知られています。「竹燕図」の箱の帙も古渡更紗であり、蠟防染の手法を用いながら、赤の模様や藍色の地が濃く染め上げられています。本展では、これまで展示したことのなかった箱の帙や包み裂なども展示します。

蠟防染の手法はあまり日本で広まらないのですが、江戸時代には木版や型紙を用いた和更紗(日本製の更紗)が製作されるようになります。また、更紗の染めの技術は、17世紀末から18世紀初め頃より発展した友禅染にも影響を与えたといわれます。友禅染は主に糊で防染します。図5は、友禅染と肉筆を併用して中国の詩人・林和靖を描いた作品の衣装部分の拡大図です。衣紋線などが糊防染によって表されていますが、まるで絵画のように滑らかです。外来の文化の影響を受けつつ、日本の染織技術が豊かに発展していったことが窺えます。(宮崎もも)

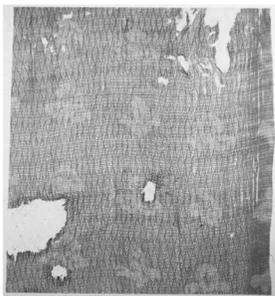


図1 淡茶地鳥花卉飛雲文藤縷縷(上代裂帖)



図2 赤地七曜文縷縷平絹(上代裂帖)



図3 蜻蛉獅子文辻が花裂

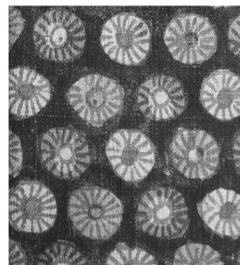


図4 馬遠・竹燕図の帙(部分)



図5 伝宮崎友禅斎・林和靖図(部分)

季刊 美のたより No.222

令和5年3月31日

発行 大和文華館